書籍紹介
石田純郎著『オランダにおける蘭学医書の形成』……坂井建雄……六八二
看護史研究会編　平野重誠原著『病家須知』翻刻訳注篇〈上・下〉研究資料篇……石原力……六八三
秦温信著『北国から、さわやなか風を』……島田保久……六八四
文庫めぐり
九州大学附属図書館医学分館貴重古医書コレクション……六二六
日本医史学雑誌第五十三巻　総目次……六八八
日本医史学会会報……六九五

《本号の表紙絵》

Joseph Jakob Plenk **著**

Lehrsätze der praktischen Wundarzney wissenschaft
— dritte verbesserte Auflage — Wien, 1799

今回供覧する上の書籍は、直訳すれば臨床創傷治療学教則となろうか。この本については宮下三郎、石田純郎氏らの先行研究がある。

筆者は、この本の蘭訳本（1800年鏤行第3版）からの重訳本である新宮涼庭訳述の「布斂吉外科則」の写本も所蔵している。

そこで原著と重訳本においてどれほどの差異があるかを、序説（凡例）、基礎学（小則）、一般教則（大則）並に特殊教則（余則）の項で比較検討した。その結果、内容に大きな変更なく訳述されていることがわかった。「外科則」の余則の中、ケレフラレーキ病とは法律にかかわる創傷医学であり、ケレーキート則は詭弁と論述の技術に関する記述であることを知った。（裁判用か）

新宮涼庭が学塾順正書院において訳述した医書に「則」を多く用いたのは、この原著のLehrsätzeなる用語を大変好んだからではないかと思える。

ここに示した原著本はケルン市ホーエ通6番地のGünther Leisten古物商店を経て筆者が入手したものである。扉の版画は腕に包帯を巻く情景らしい。

（中西　淳朗）